



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

### 議論を通して得た仲間

#### － MBA 島田哲夫の場合 －

5

私はS ビジネススクールの MBA 課程で2年間、92名の仲間と大いに議論した。議論を通して築かれていった友情とはどんなものか。ここで少し紹介したい。

10

ディスカッションを尽くした仲間と過ごした記憶は、鮮明な像を伴って脳裏に焼きつく。だから、ほとんどの授業のことを、ついこの前のことのように思い出すことができる。

あの日のケースでは、主人公の仕事の進め方について、その巧拙を議論した。この議論で、私の主張に賛同してくれたのは岩崎と中津と吉岡で、逆に食ってかかって来たのが坂本だった。これがいつものパターンだった。だいたい私は、坂本とは意見が合った試しがない。彼は私に向かって、「どうして君は毎日そんなに頑固なのか」といつものものしる。こちらも毎回頭に来る。でも、彼のおかげで、私は自分が頑固者であることを忘れないですむ。私が少し折れて、彼が喜びそうな発言を口にすると、彼はいつもニヤッとする。坂本も、私と対立する議論になると、10回に2回か3回は折れてくれる。そういうときは、だいたい私が主人公の部下の人心に触れるような発言をしたときだ。坂本は自分が折れたときはたいてい、私とはしばらく目を合わせない。

20

---

このノートは慶應義塾大学ビジネス・スクール博士・修士課程併設科目「ケースメソッド教授法特論」の教材とするために、竹内伸一(ケースメソッド教育研究所)が作成した。(2004. 10)

本ノートは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、ノートの複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール(〒223-8523 神奈川県横浜市港北区日吉本町2丁目1番1号、電話 045-564-2444、e-mail case@kbs.keio.ac.jp)。また、ノートの注文は<http://www.kbs.keio.ac.jp/case/index.html>。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、本ノートのいかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またはいかなる方法(電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない)による伝送は、これを禁ずる。